

きんゆうフィット

地域とともに その先へ

かけがえない絆

社内の工場に横内昭次郎会長を中央に、横内秀男専務取締役・工場長(右)と横内真樹取締役営業部長



■創業 1966年4月に個人創業、69年10月に株式会社化
 ■代表者 会長・横内昭次郎、社長・横内秀敏(会長は2014年秋の叙勲で旭日双光章を受章)
 ■所在地 横浜市都筑区大熊町111
 ■社員数 18人
 ■連絡先 045(471)9757

木工3次元加工技術に強み

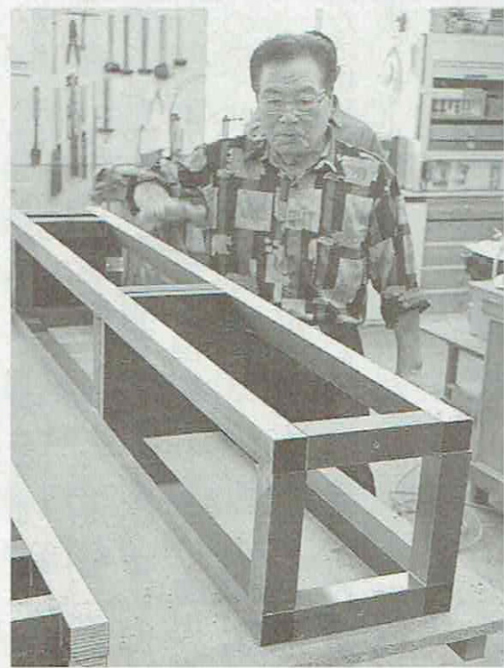
横内製作所

南米初となるリオデジャネイロ五輪の開催まで2カ月を切った。日本と平日違う時差に、テレビでライブ観戦を楽しみにしている視聴者にとっては悩ましいところだろうが、各種競技とは別に気になって見てもらいたい、ある放送局の現地特設スタジオがある。音響機器などを収めた什器(スタジオ家具)タービンなどの試作品開発に携わ

具一式だ。

手がけるのは横内製作所(本社・横浜市)。創業者で現在は会長と神奈川県家具工業組合理事長を務める横内昭次郎氏は創業前の昭和30年代、キャビネットの世界で最先端を誇っていた出向先の大手企業において、木工で家電製品やタービンなどの試作品開発に携わ

リオ五輪に半世紀の技



スタジオ家具の仕上がりを確認する横内会長

技術力はもちろん、量産化するうえで欠かせない原価計算にもたけていた力量が社内外の目に留まり、また重鎮の後押しもあって開業を果たす。それから約半世紀。同社の主力製品は海外で足跡を残すようになる。

はじめ、発泡樹脂などによる試作モデル製作や、コンピュータ制御で多様な加工を全自動で行うマシンクセンターによる3次元加工(樹脂全般)といったメニューがずらりと並ぶ。そのなかで、音響機器などを収めるスタジオ家具は今夏、日本の裏側にあるブラジル・リオデジャネイロの特設放送局での活躍が待っている。約10年前から、キャビネットの延長でスタジオ向け什器の製作に乗り出し、その技術は東京芸術大の音響室(スタジオ壁面)にも生かされている。

実際の五輪競技で、同社の木工3次元加工技術が使われたことがある。12年のロンドン五輪ではアーチェリーに、今夏のリオデジャネイロ

スタジオ家具 特設放送局で採用

ではエアピストルのクリップ部分に採用される。本物のクリップにはオールナットが使用されるが、筑波大で3Dスキャンしたクリップを、選手の手でフィットする木で仕上げた。

店舗什器の設置場所は、羽田、成田、関西の各国際空港にも及び、免税品が陳列されている。取締役営業部長の横内真樹氏は「店舗什器は照明を使うので、電気技師が必要。規格基準も厳しい」と話す。設置場所を増やしていくには、有力な企画設計会社と協働していかにかかっているとみている。

取引金融機関はかながわ信用金庫(本店―神奈川県横須賀市)。同信金を含め神奈川県内全8信金が年1回、合同で開く商談会に昨年、ブースを出した。それをきっかけに2社を訪問する機会を得たが、同社では期待を込めて「見本市の枠を超えた」イベントへの発展を望んでいる。